おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和３(2021)年
12月号
通巻616号
毎月23日発行
（題字　矢追日聖）

★発行日　令和３年12月23日
★発行所　大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町１の12
☎(0742)45-1192
★印　刷　大倭印刷株式会社
★定　価　１部　３００円
年間購読料3,500円（送料共）
★郵便振替　01050-6-67002
大倭出版局
URL http://www.ohyamato.jp

「祈武運長久」父の形見の日章旗　　中島　健さん提供（文・６頁）

昭和42(1967)年12月23日　降誕祭法話より

霊界が実体で、現界は影である

法主　矢追日聖（満56歳）

自分は自分で守っていく

毎年巡ってくる十二月二十三日ですが、今朝はちらちらと雪花も散っておりました。この須加宮の大本宮へ移ったちょうど二十年前、その年最初の降誕祝いとして皆さん方がお集まりになった時も、雪花が散っておったと記憶しています。同じような天候が巡ってきた実感がございますから、今日はやはり二昔の節に当たるように思うんです。

この日には、いつも似たり寄ったりの話をしていますけれども、年々、歳は取ってまいります。私は明治四十四年十二月二十三日生まれだと親から聞いており、戸籍もそうなっておりまして、おそらく間違いないでしょう。十二月の暮れには数え年で言うと五十八歳で、満とはだいたい二つ違ってくる。昨夜きっちり勘定をしてみたら、今年でこの世に生を享けてから満五十六歳になるらしい。

五十六歳とすれば、まだそう年寄りではないんですが、頭が白いので十年前頃から六十歳ぐらいで通っておりました。精神年齢はあるいは百歳を越しておるかもしれないけれど、肉体の老化していく自然現象だけはどうすることもできません。これは皆さんでも私でも同じでございます。

若い人たちと同じように仕事をしておったのが、だんだん高い所に上がれば足が震いますし、重たい物を提げれば腰が痛くなる。目方も大分に軽くなってまい

りまして、十年前の肉体とは開きがあります。
この土地へ入ってから今年の十月三十日で満二十年、大倭の形が変わっていったと同時に、私自身の肉体もそれだけ歳を取ったわけです。しかし今日ここでその当時から大倭へお越しになっている方をたくさん見かけますけれど、二十年前も今も全然変わっていない実感があります。これは非常にめでたいことでございます。
まあ、お互いこの世の中に生まれた以上、喜びを持って一日でも長生きできるよう健康に努めなければいけない。それには自分の体を自分でよく監督し、言い換えれば自然の心のように自分は自分で守っていくこと。これがひとつの信仰であろうと思います。

肉体のない人間の世界がある

今日の話で特に取り上げたいのは、十一月の月次祭でも話したつもりですけれど、私たちがこの世に生まれることの重大さ、その意義です。おそらく世間の人にはあまり自覚がない。
夫婦が寄って子供が出来ることは、お産の時の心配はございますが、それほどまで不可思議とも思わない。ところが霊の世界を見てみますと、私たちは奇跡的にこの世へ生まれてきております。
この世に人間として生まれさしてもらった本当の意味を、我々は心でとらえなければいけない。皆一人一人、時機とか、生まれる土地とか家とか、前の世から持ってきた条件がいろいろございます。条件には個人差があって、自分がこうだから相手もこうだとか、1＋1＝2と数学のようには割り切れない不可思議なものがある。これは理屈ではちょっと分からない問題です。
私の場合も何の因縁か知りませんけれども、矢追という家に生まれて、神さんの道だとか、宗教だとかいう仕事に入ってしまった。私自身の意志でない方向でしたが、生まれる以前から決められていて、こういうようなお役目を持ってこの世へ生まれて来たと、今だから言えるんです。
幼い頃や、小学校・中学校の時とか二十歳までは、そうした自覚がほとんどなかった。なかったんだけれども、いわゆる霊の世界と我々人間の世界との交流、結び付きがあるんで普通の人よりもちょっと変わったところがございました。
最近は皆さん方に分かりやすいように、肉体を持っていない別の世界におる人たちを霊人とか霊界人、肉体を持っておる我々人間は現界人と、そんな言葉を私は使っています。
実際は別に何だっていいんですが、我々の世界以外に肉体を持っていない人間の世界があり、そこも我々の社会と同じような仕組みで動いています。例えば彫刻している人もおれば、本を読んでいる人もおるし、また家も建っております。我々人間の世界と変わりありません。
そういう肉体を持たない人の社会と肉体を持っておる我々の社会とが、ちょうど夜と昼、裏と表のような関係によって結び付いている。切り離すことができない。言い換えれば、私たちの肉体と心のようなものです。
心は目に見えませんけれども、その心と肉体とは切り離すことができない。何かに腹を立てたりした時、頭に血が上る、あるいは胃に固まりが出来る。あんまりびっくりすれば腰が抜けてしまう。そういうように心の働きが、いかに肉体へ大きな力を及ぼすか。心臓がドキドキ高鳴るとか、パァッと顔を赤らめるとか、肉体に原因はない。心の働きから来るんですね。
人間の目に見えない心と、目に見える肉体との関係がそれほど深いように、肉体を持たない人間の世界と、現在の我々肉体を持っておる人間の世界とが切り離すことのできない、密接不可分な関係を持っております。
我々の社会は霊界のことを知らないし、否定する、全然信じない人が多いと思います。しかし否定しても否定しなくても、始めから事実そう出来ておることが、私には分かっているから言い切るのであって、皆さんに無理無体に押し付け、信じよと言うんじゃありません。
これは自覚するかどうかです。今、信じなくてもいい。私がこうして決定的な言い方をしていますけれども、いつか、皆さんも何かを体験して、ああ昔、矢追日聖という人が言っていたことは本当だったと思い出すような、ただ知識という程度でよろしい、覚えておいてほしい。自分で分かる日が来なければ分からないんです。

まず霊界を鎮める

現在、我々は人間の世界だけを中心に置いて物事を考え、世界中の人たちがいろいろ戦争をしている。私の立場から言いますと、一方を忘れ一方だけで考えているからです。
例えば病気を治療する場合に、肉体だけでなく、その人間の心を考えなければ治りません。昔から「医は仁術(じんじゅつ)だ」と、つまり医者の徳とか患者が医者を信頼するという精神的な働きによって病気が早くよくなったり、よくならなかったりする。そのように精神と肉体は一つです。それを切り離して、心を抜きにして肉体だけの治療をやっておってはね、病気は治らない。
同じことでね、我々人間社会が本当に平和にいこうと思えば、肉体を持たない人間の世界とバラ

ンスを取る。手を結ばなければならない。今は霊界と現界に本当の交流がなくて仲良くできていないから、みんな平和を望んでいながら戦争が起こるという逆の現象が出る。現界がこんなふうだと、その反面である霊界も乱れます。

霊界を鎮めるには、現界の気、つまり我々の心を注がなければならない。霊界からの穏やかなひとつの気というものが流れて来なければ、人間の世界も鎮まりません。

そういう両世界の結び付きがどうもうまくいっていない。世界の平和を論ずる人はたくさんおられるし、原因はいろいろあるのかもしれませんけれども、私が見ておりますと、そうなっています。

これは本当の大きな立場からの見方で、まあ俗に宗教の世界になります。別にどっち先こっち先じゃないんだけれども、霊界人を鎮める心の動きがまず現界人になけりゃいけない。霊界の方は現界にすがり付いてきておるんです。

現界は現界で霊界にすがり付いておるし、女と男のように、本来両方が持ちつ持たれつの関係にある。しかし情けないことに現在は「神さん仏さんなんかあるかい」と言う人が世間に多すぎる。

自分自身の肉体に対して、目に見えないけれども心を持っていることを否定する者はいない。そして我々はいつかその時が来れば死ぬ。これは皆分かっているけれども、実は、その時に霊の世界へ入って行く。

その霊の世界の方が、宇宙の仕組みから言えば実体なんです。

最初は「気」があるだけ

今、現象界で生きておれば、我々は草も木もひとつの形、物と見ます。一切の物全てが、地球とか月とかの天体であっても、何億年かのはるか昔に出来たんでしょう。しかしそれ以前に形ある物はなかった。元からあったのは「気」だけです。

「気」いうものは、例えば我々が一番身近に感じるのは男女の仲です。陽性（＋）と陰性（－）やからじきにへばりつく。最初、何にもない気から出発して、何らかの力が働き、肉体を通して形ある子供を産む。

元々宇宙の根本はそういう気の力、エネルギーと最近は英語で言いますけれども、気というのはいわゆるエネルギーですね。

我々の想像もつかない何億年という大昔、形も何もなかった時代に、そんなものだけが宇宙にあった。その時の気が、大倭の神ながらで言えば、タァとカァという陽性と陰性であって、あなたたち男と女と同じ一対の気です。

タァとカァ、一対の気がひとつの運動を起こして、いろいろな形の物ができる。そんなことを日本の古典、『古事記』とかでも具体的に書き表しておるんやけれどもね。

我々は今、形の世界に生きていますけれども、そういうような気から出て来ておるとすれば、根元をたどって行くと形のなかった時が本体です。それがだんだん変化して形ある物が出来たんやから、やっぱり我々の本当の故郷というものは霊の世界なんです。

霊界が実体であって、形のある人間世界が影。実体があってそれを写してるんやから、いわゆる現世（うつしよ）ですね。また人間として生まれてきた肉体は、霊の世界に元々ある実物を写してきた姿だから現身（うつしみ）。昔からそんな大和言葉がございます。

今申しましたように、我々の今生きているこの世界は、本当を言えば影の世界であって、霊の世界が実体です。現世で生きておる者が、本当に平和に幸せに暮らしたいと思えば、自分の故郷というものを知らなければいけない。

その故郷を大倭で言うたら、太加天腹（タァカァマノハラ）です。陽性のタァと陰性のカァからできているお腹のこと。太加天腹には神さんがおるんやから、絶対に信仰していく。これは、その力を借りて何とかしようというような強欲信心じゃありません。自分たちの故郷である太加天腹の世界に自分の心を打ち込んで、太加天腹の気と自分の心を交流させていく。ちょっと表現がまずいですけれど、つまり太加天腹と一体になるということです。

そこは一人一人の霊界人たちも沢山おる世界を意味しております。生きている我々の世界において、小さく言えば自分の両親とか家、自分の郷里、あるいは自分の国、自分たちの地球とか天体というように、だんだん拡大していけば一切全部が太加天腹です。また子孫が出来てくれば、自分自身が太加天腹になるわけです。

実に勝手のいい自由に使える言葉で、「太加天腹」という漢字を借りていますけど、「タァカァマノハラ」というのは心の故郷であり、肉体の故郷でもあり、一切全ての根源という意味です。これは大倭で言うひとつの信仰の対象です。

自分の細胞の中にいる先祖

やっぱりね、お互い個人でも家族でもみんな人間としての願いはあると思います。仲良ういきたいとか、不時の災難や病気がないようにとか。

そうした困った時、人間の知恵ばかりに頼る。例えば病気になれば医者に頼る。けっこうなことなんです。けれども、霊界には皆さんのご先祖さんがたくさんいらっしゃる。それも忘れないことです。形の上においては、血液肉体の細胞の中に

ね、歴代の先祖さんの骨が入っている。ここに形の骨がある（法主さんが自分の体を叩く音）。

別にお墓へ行かなくたって、生きている自分の肉体の中に、先祖さんが入っている。だから、いつでも自分は一人じゃない。自分の血液の中にも、何代も前からのご先祖さんの肉体を持っておるんだし、その先祖さんの心も何かの形で受け継いでいる。先祖さんと子孫は一体です。

何かひとつ考える時でも、自分の家族が五人であれば、その裏に何千人何万人の自分の血の引いた先祖さんが同居しておるんだというね、まずその気持になってほしい。

世界の平和とかそんな大きなことを考える必要もない。もう身近に自分の家庭だけでも、夫婦、親子だけでもよろしい。生活の中において心と心の結び付きがなければ、生きている人間の家族はうまくいかない。ましてや死んだ何千人何万人の先祖さんと仲良ういこうと思えばですよ、もうちょっと心の浄化を計らなきゃいけない。

そのために修養していく。みんな幸せになろう、自分も他人も幸せになっていこうと訓練していくのが、信仰であり宗教だと思う。

神さん仏さんを前に祭って、手を合わせて、やれご利益下さいとか、やれ病気治して下さいとか、そういう強欲を出して拝む。これは信仰ではありません。本当の宗教とは言えない。

ところが難儀なことに人間にはそんな弱さがある。これもやむを得ない。私は悪いとは言いませんけれども、自分が勝手に不養生して病気をこしらえておいて、神さん助けて下さいと言った時にだね、果たして神さんは聞いてくれるかどうか、自分自身で考えたらいい。

例えば極道息子がおって、仕事もせず遊んでばっかりいて金をせびりに来たら、親はきっと不足言いますわね。それと同じことですよ。本当の親神さんであれば、どんな気持になるやろか。考えたら分かるでしょ。わずかな賽銭あげて、祝詞やの般若心経やの唱えて手を合わせても、神さんはめったに聞きはらへん。

拝むのは自分で自分を慰安してるんやから、かまわないんですよ。けれども、人間の勝手な考え方で神さんに拝むということは、因縁因果の法則から言っても自分へ戻ってくる。かえって結果が良くならない。

先祖さんと仲良う暮らす

それよりもまず身近なご先祖さんに、朝ご飯をあげる時にでも「先祖さんおあがり、私らも頂きます」と声かけて、ぼちぼち生活の中から仲良うしていく。

先祖さんと仲良うなれば、自分の子孫が「ああ今困ってるな」と思ったら助けてくれます。生きてるお父さんお母さんと同じように、子供が高い所から落ちかかったらつかまえてくれるし、知らんと毒のもの食べようとしたら止めてくれる。

どうしてくれと頼まなくても、具合の悪いことはうまくいくように手伝ってくれる。霊界人には霊界人としての手伝い方があります。

その代わり、我々も人間として先祖さんに対してやるべきことがある。それは言い換えれば心の結び付き、仲良うすることです。別に神さん仏さんやの、不動さんやら観音さんやら、前に並べて拝むよりもよっぽど身近に助けてくれる。血のつながった相手やからね。これは肉体がないだけで人間やから助けてくれる。神さんやったらあきませんよ。

その半面、何か悪いことをしとってごらん、先祖さんにカチンとド頭いかれます。子供が二階から転んで落ちたり病気になったりしますよ。先祖さんが気を付けよとヒネりよる。慈悲なんです、これは。

だから神さんとか仏さんとか、そんな言葉は使わないの。先祖さんは肉体を持たないけど人間、我々は肉体を持っている人間、同じ人間同士という身近な気持で仲良うする。

自分の先祖さんとその子孫が仲良うするだけでもよろしい。先祖さんと先祖さんはどこかで皆結び付いている。いわゆる「万有一根」であり、ずっとさかのぼって行けば、先祖さんは一つです。先祖さんたちが社会全体にどこかで結び付いているから、その社会もぼちぼち仲良うなる、うまくいく、平和になる。まあこんなことは先の長い話ですよ。けれども身近なあんたたちの先祖さんと子孫だけでも仲良うなってほしい。

私も先祖の何かの因縁によって矢追の家に生まれて来ました。現在の、この移りゆく時代や社会において必要があるからこそでしょう。

ここヤマトの北和は物部一族の、いわゆる日本の古神道の本拠地です。そういう地域に、明治四十四年に生まれてちょうど五十六歳の今は、この社会においてやはり宗教の仕事をしていかなけりゃならない時代です。

いろいろな因果関係で、時代に応じたお役目を持って、私はヤマトの矢追の家に、大倭の神域の中で生まれた。私にはそういうひとつの宿命があります。

世の中は持ちつ持たれつですから、一人一人個人差があって、皆さんには皆さんとしてのお役目があるはずなんです。これからも皆さん方と共に協力して私は私のお役目を果たしてまいりたいと思います。

（文責・編集部）

こもれる魂魄の地を訪ねて（第52回）

信長の廟所

兼田　隆

「ときは今あめが下知る五月哉」。明智光秀の謀反の決意を表した有名な発句です。１５８２年（天正10年）６月２日早朝、本能寺の変が起こります。天下統一を目前にして、襲撃をうけた織田信長は寺に火を放ち最期を迎えたと伝わります。

明智軍は信長の遺骸を血眼になって探しましたが発見する事ができず、後の山崎の合戦に大きな影響力をあたえています。

しかし現在、京都を中心に信長の廟所や供養塔、首塚なるものが、京都市の建勲神社や今宮神社など信長を祀る所を含めると全国に20ヶ所以上はあります。これだけ多くの廟所が存在するのは信長公が群を抜いていると思います。カリスマ性をもった信長に恩を感じた人々が、その供養や追悼の為に建立したものもあれば、秀吉の様に権力を見せつける為に建立したものもあります。

今もって史跡巡りをしている私ですが、長年の歳月をかけて訪問した信長公の廟所の殆ど全部に近い18ヶ所を下段の写真と共に次にあげます。拝観するにあたっては謝絶の寺院もありますので、事前にお調べになってお参り下さい。　合掌

①**本能寺**（京都市中京区）　元本能寺跡の石碑と現在地の三男織田信孝が刀剣を埋めた墓石。

②**阿弥陀寺**（京都市上京区）　清玉上人が本能寺より灰を集めて墓石としている。

③**大徳寺総見院**（京都市北区）　豊臣秀吉が建立、信長の木像を火葬にして墓石としている。

④**妙心寺玉鳳院**（京都市右京区）　滝川一益が建立、武田信玄や勝頼などの墓あり。

⑤**大雲院**（京都市東山区）　信長に殉じて自刃した嫡男織田信忠の法名よりつけられている。

⑥**建仁寺**（京都市東山区）　弟織田有楽斎が建立、七重の石塔供養塔あり(写真左隅、見えにくいが)。

⑦**京都府立伏見港公園内**（京都市伏見区）　豊臣秀吉が建立。

⑧**聖隣寺**（京都府亀岡市）　五男織田秀勝が建立。

⑨**安土城跡の摠見寺**（滋賀県蒲生郡安土町）　豊臣秀吉が信長の一周忌に建立。

⑩**西光寺**（滋賀県近江八幡市）　京都の阿弥陀寺より分灰されたものを埋葬している。

⑪**南宋寺**（大阪府堺市）　大阪の陣で戦死したという説のある徳川家康の墓や千利休の墓もあり。写真なし。

⑫**総見寺**（愛知県名古屋市中区）　次男織田信雄が建立。寺が戦災に遭い平和公園に移転し、その墓を人々が削って飲めば病が治るとの迷信から削られ続けて、現在の総見寺に移転している。ちなみに拝観は6月2日の信長の命日「信長公忌法要」時のみ開扉する。

⑬**総見院**（愛知県清洲町）　本能寺より発見されたと伝わる焼け兜が保管されている。

⑭**崇福寺**（岐阜県長良町）　お鍋の方が建立、遺品を埋めて墓石としている。

⑮**高野山奥の院**（和歌山県高野町）　大名の墓を始め、敵将の明智光秀の墓もあり。

⑯**瑞龍寺**（富山県高岡市）　前田利長の正室永姫（信長の五女）が建立。写真なし。

⑰**泰巌寺**（熊本市八代市）　細川忠興が建立、現在、寺は廃寺で墓だけが残る。

⑱**西山本門寺**（静岡県芝川市）　信長の首塚と言われるものがあり。

表紙写真について

父・中島建次のこと

あじさい邑　中島　健

◆英国より戻った日章旗

令和3年10月29日午後3時、奈良県庁にてこの日章旗の寄せ書きを受け取る。思い出すと、最初は滋賀県庁より電話が入った。「中島建次さんの身内の方ですか」、「受けとられますか」と。よく理解できないけれど一応、「受け取らしてもらいます」と電話を切ってから、つい2～3年が過ぎて忘れていた。

先日、奈良県地域福祉課から「お届けしましょうか。おいで下さいますか?」と一報があり、「こちらがお伺いします」と返事後すぐ県庁に向かった。早速、手にして拝見していると女性の若い課長さんが笑顔で「よく来て頂きました、私も見るのが初めてです。課の若い子にも見せてあげたいのでよろしいですか」。10人位集まってきて、恐る恐る囲みながら見ていた。

「判明に至った経緯」のプリントを頂き、その後問い合わせて滋賀県健康福祉政策課援護係から「履歴書」も送って頂いた。(※以下その要旨)

(1)Phulippa Kays氏より元の所有者またはその関係者に返還したいと依頼があった。この「日章旗」は、同氏が20年ほど前に英国のアンティークショップで購入したものとのこと。

(2)旧陸海軍人事関係資料にて、中島建次（本籍地：滋賀県）が抽出された。

(3)大正2（1913）年1月4日生まれ。

(4)昭和18年9月15日、臨時召集で2度目の応召、第26野戦防疫給水部に所属。

(5)タイ・ビルマ国境付近の作戦に参加、防疫、警備、患者護送や兵站病院に勤務等。

(6)昭和21年6月、内地帰還始まる。陸軍伍長となる。7月、広島港上陸、召集解除。

前列中央が父、その膝に健（２歳位）、父の真後ろが弟の康治（健と１歳２ケ月ちがい）で、母の濱子が抱いている。その他の人が分かるような身内は皆亡くなった。

◆父の記憶

帰ってきて、ポンチャン（杉本順一さん）に見てもらった。これは『おおやまと』に載せようと、私がどうしようかなと思う間もなく話が纏まった。

私と弟（康治）の兄弟二人と母親（濱子）を残して、父は兵隊に召集され、ビルマ戦線に送られたのだと聞いている（※ビルマは英国領であった）。終戦後、復員して、その年の内に亡くなった。

父の存在は、家庭で母が語っていた言葉の反復で、そうだったのだろうと子供心に記憶をつくって、父が復員するのを待っていたように記憶している。

父の記憶がはっきり残っているのは、復員してきた時、兵隊さんの軍服姿で玄関に直立姿勢で立った姿である。私が6歳の時のことである。

それから、私を連れて滋賀県の実家に帰国の挨拶まわりをした。私を自転車の後ろに乗せて走っていた時の息遣いや自転車のペタルを踏んでいる後ろ姿が記憶にある。

わずかの間の息ぬきに好きな玉突き店で遊んでいたところへ、母の使いでことづけを言いに行った時、「お父ちゃんが玉突きで遊んでいたこと、お母ちゃんに言うたらあかんで」と言っていたこと。

後で考えてみたら、復員して3ケ月位で亡くなっている。葬儀の時、誰かが「たけっちゃん、お父ちゃんの顔よう見ときや」と、丸い桶のような棺をのぞかせてくれたのが父と最後の別れだった。

◆大倭へ来た頃

その後、昭和24年頃？　近所の家で教導されていた法主様のお話を聞いて、母が大倭へ入門を願って受け入れてもらったのである。法主様に作って頂いた位牌には、母の記憶で「昭和22年12月16日帰幽、33才」とある。履歴書にあるように本当は昭和21年だったのかもわからない。

それから私達の大倭生活が始まった。自然体の環境、ランプの灯、生活水は2つの池から汲み上げたもの。水面にはオタマジャクシがゆるゆると泳いでいるのをバケツで追い払い汲み上げた水で朝の洗顔した後、子供達全員が神前で朝のお祈りする。朝食をすますと一列に並んで学校に向けて「黎明大倭」を歌いながら歩んで行った。小学校へは15人位で山越えして学校に向かうのである。

私は河内に生まれた環境から山の中の大倭生活へと変わって、今さらながらよく頑張ってきたものだと思っている。戦争の大きなうねりの中で、人生航路が大きな渦となって押し流された一人で

もある。

◆今、去来する思い

それから70余年、私は傘寿の80歳を迎えさせて頂いた。その時に、父の形見とも言える日章旗「武運長久」の寄せ書きが届いたのである。

振り返ってみると、両親があって私達兄弟が生を受け、法主様と奇跡のような出会いをさせてもらって悔いのない人生を終えようとしている。

父が霊界に帰って70余年も過ぎて、自分ももう間もなく霊界に帰る日が迫っている。父にも子にもドラマの幕間の、人間の原点でもあるものを差し出されたように思うのである。

この寄せ書きは、戦地で戦友の仲間や上官達と命を懸けて励ましあう印である。その気持を考えると、書く方も書いてもらう方も緊張感が一杯やったろうなぁと、決意のようなものを感じ取る。

もし、父が復員することなく戦地で絶命していても不思議ではなかっただろう。父の弟は同じ戦地から位牌で帰国したと、親元の叔父が涙していたことを覚えている。私の父は、まず家庭に生還してたった3ケ月であっても家族、一族の見送りを得ての帰幽であった。

私はこの状況で、大倭に迎えられて法主様の温かい懐に抱かれて、神ながらの薫陶で生かさせて頂けたことが人生の至福であると思っている。私が帰幽したら一番先に報告したい。父はそのことを一緒に喜んでいてくれるものと信ずる。

昔、同級生から父を戦場で失った話を聞いた時、友は拝み屋さんに「お父さんは霊界で苦しんでいる」と言われたという。法主さんに相談したら、「無理やり戦場へ連れていかれて亡くなった人は、そんなに苦しんだりすることは少ないように思う」と聞いたので、そう伝えた。

波紋　活眼をもって見よ

京都府宮津市　藤本　宏秋

まさかこのような時代を体験するとは思わなかった。表だってのドンパチはないけれど、まるで戦時中のような言論統制と同調圧力ではないか。嘘偽りない今の心境である。

大手マスコミから流される情報は偏りすぎていて、あるひとつの方向へ誘導しているのを感じる。そして、意見の相違を生み出し、仲の良かった人間関係を分断していく方向に働いているように思えてならない。

反対の意見を言う専門家や医師はテレビには出られなくなり、インターネット上での発言にも、ファクトチェックという名のもとに言論統制が行われている。もちろんインターネットの情報は玉石混淆なので、それを読む者の判断が問われるのはいうまでもないが……。

何かわからないことが起こった時は、お金の流れを見ると見えてくると聞いたことがある。無料という言葉に惑わされず、本当にそれが必要なのか、そして、その裏でどのようにお金が流れているのか考えてみると、見えてくるものがあるのではないだろうか。

それをすることで不都合なことがもしあったとして、製造した会社は責任を取らないような契約が結ばれていることを知っている人はどれだけいるのだろう。

そして、不都合なことがあって裁判をする際、その証明をしなければならないのは、被害者の方になっている。因果関係は不明とされていることを証明するのはかなり難しいことだろう。弱者は泣き寝入りするしかないのだろうか。

テレビや新聞の情報に翻弄されず、嘘か真か、疑って疑って疑っても、疑いきれないところまで問い続けることが大切なのかもしれない。

ところで、大倭紫陽花邑には「交流の家」がある。この建物は、ハンセン病回復者の宿泊の拠点として建設されたのだが、建設初期の段階で地元民約百名余りが建設反対のため押し寄せてきたそうだ。その時、積みかけていたブロックを自ら崩し、いったん建設を中止して、ワークキャンプの若者たちは医師の資料を持って地元民の説得にまわったという。私は、ついつい真っ直ぐに突き進んでしまうが、その柔軟な精神を持ちたいものだ。

現代は情報が多すぎるから、逆にいっそのこと、それをいったん離れて、大自然の中に入っていくことの方が大切なのかもしれない。

法主さんの書かれた「大自然の姿を活眼をもって見よ。無統制の中に整然たる統制があり、千差万別の不平等の姿を持つ生物一切が大自然の平等の恩恵に生かされている現実こそ、この神ながらの原理を雄弁に物語るものである。」（やわらぎの黙示・神ながらの大道にしたがう・60頁より）という言葉が思い出される。

自然界は、多様なものが多様なままに共に生きている。それは、肉眼では見えない微生物やウイルスの世界でも同じであろう。

自然界は、人間界で何があろうと、刻一刻、淡々と変化していく。

寄せては返す波が生と死を、色づいてハラハラと落ちる紅葉が諸行無常を、渡り鳥は国境なんて本当はないということを、無言で気づかせ、教えてくれる。

何でも人間にとって都合のよいようになると驕ることなく、人間も自然界の一部であることを忘れないでいたいものだ。

あじさい日誌

11月8日　嶺本佳秀さん（奈良県生駒市、4月帰幽）の高齢のお母さんが来邑。拝殿で山﨑波留茂さんに、「大倭にご縁を頂いていたお陰で最期は家に戻ってくれた」と話されたそうです。

11月15日　大倭神宮月次祭。
　藤本宏秋さんに誘われて大阪市の山田麗さんが初参拝。

11月21日　午前8時30分から奥津斎庭の神籬の金剛大龍王さんの「寝床」の薨敷が行われました。

11月23日　大倭大本宮月次祭。
　この日発行の11月号『おおやまと』に「トランスの役目～現界と霊界の間に立って～」として掲載の、昭和42年11月23日の法話をお聞きしました。

11月28日　大倭神宮へ佐藤圭子（東京都小平市）・隅田真弓（岡山県総社市）・ニツコウ智恵美さん（岡山県真庭市）が参拝。

12月1日　午後、大倭会館のサークル合同で会館の大掃除。

12月4日　大倭神宮で金鵄祭が行われました。
　午後、交流の家でFIWC定例委員会。
　夜6時から大倭会館において大倭町自治会役員会。

12月6日　大倭神宮月次祭。
　夜、大倭会館で邑倭の会。

大倭安宿苑では

11月17日　年に1度のストレスチェックを対象事業所で実施。（菅原園）

11月29日　アメリカンドッグを目の前で揚げておやつ作り。（須加宮寮）

11月7日　家族交流会代替企画で写真撮影とメッセージ作成。

12月2日　須賀の道周辺の地域清掃は落葉が一杯でした。（長曽根寮）

11月21日（特養）大判のイラストのクリスマスツリーに飾りつけ。裏からは電飾照明も。

11月27日（デイ）松ぼっくりで小さなクリスマスツリー作り。孫にあげるプレゼントが話題に。（茂毛路園）

11月8・9・10日　予約制・アクリル板越しで、面会を再開。（八重垣園）

12月1日　お赤飯と一人鍋、紅白饅頭で創立26周年のお祝い。

大倭会通信

▼11月23日の役員会で日聖祭・帰幽祭について打ち合わせ。
　禊会は令和4年1月より再開すること、文化行事・文化講演会も検討を始める、等の話題が出ました。
　顧問でFIWCの湯浅進さんが出席、今年は交流の家で年末キャンプを実施予定とのこと。
　顧問で新皇教宮（群馬県）の桜井節子さんは欠席でしたがFAXでコメントがありました。
《十一月二十日、新皇教宮月次祭。連日続いた青天が今日は一服。日差しのない分、体を動かすのには丁度良い気温である。大倭より日元さんの手によって植樹されたもみじが、今年はあざやかに色付き境内を染めている。細く小さな一本が大きくなったものだ。日元さんのありし日がしのばれる。同時に年月の経ったことを実感する。
　この地より奈母太加天腹、奈母太加天腹、天空にひびけ。
　この気がどうかどうか何処までも広がって、あの雲の上までも…。何だかむしょうに泣けてくる。　合掌》

▼新入会員、11月～伏浦和美さん（奈良市）

あんない

＊**年始祭**（大倭神宮）
1月1日（祝）　午後2時から大倭神宮にて。
　密集・密接を避けるためご配慮・ご協力のほど、どうぞよろしくお願い致します。

＊**月次祭**（大倭神宮）
1月6日（木）　午後2時より大倭神宮にて。

＊**大とんど**
1月9日（日）　午前9時30分より大本宮西の斎庭にて。注連縄や門松等を火にあげる神事です。当日の天候により日時を変更する場合もあります。

針金・プラスチック等、不燃物は必ずはずしてきて下さい。

＊**大倭会主催禊会**
1月9日（日）　午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

＊**月次祭**（大倭神宮）
1月15日（土）　午後2時より大倭神宮にて。

＊**月次祭**（大倭大本宮）
1月23日（日）　午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

新年のご挨拶を申し上げます

　真の平和社会を祈る者は、まず「みそぎ」によって自己本霊の浄化に努め、音高々に柏手を打ちながら「奈母太加天腹」の言霊を大宇宙に向って高唱することが望ましい。私は強制しないが悟れる者なれば自らの琴線に触れるものがあると信ずる。われから発するものが浄霊波であれば、それは即刻自分のもとに戻ってきて、やがては自他諸共幸せにする働きとなる。相対的に存在する神はいないので、神を祈ることは、すなわち自己本霊を祈っていることになる。神ながらの御本尊には自己の現身を映す鏡が掛かっているのも神人は一体だからである。ただし霊界にある人格霊は人間と同じく神の本体ではなく、その分神霊としての被包括的神であると説明した方が分かり易いと思う。

野草社『やわらぎの黙示』178頁より

大倭七十八年　元旦

宗教法人大倭教　教長　矢追家麻呂
紫陽花邑　邑人一同